

改曆準備委員會經過概要

(外務省條約局)

第4回交通總會準備ノ爲メ、交通委員會ニ依リ任命セラレタル改曆準備委員會ハ交通委員「デュールチチ」氏(「ユーゴスラヴ」)ヲ議長トシテ昭和六年六月八日ヨリ同十三日ニ亙リ壽府聯盟事務局ニ會合。出席者ハ獨逸、丁、西班牙、北米合衆國、英吉利、佛蘭西、伊太利、葡萄牙、波蘭、「チエ亞爾然ツコスロヴァキ」瑞典及「ユーゴスラヴ」ノ各國ニ於ケル夫々ノ改曆國內委員會ノ代表者及國際鐵道聯合ノ代表者ニシテ、本邦ヨリハ澤田公使之ニ指名セラレタルモ差支アリ。小官(小林遞信事務官)代リテ「オヴザ」トシテ之ニ出席セリ。(4ème C.G.C.T./C. P/6. (1))

委員會ハ、八日、先ツ各國委員ヨリ其ノ國ニ於ケル國內委員會ノ經過及其ノ態度竝ニ國內ノ事情ニ關スル説明アリ(英、米、獨、佛、伊、葡、瑞典、「チエツコ」ニ關シテハ 4ème C.G.C.T./C.P./5、波蘭ニ關シテハ 4ème C.G.C.T./C.P./5 (a)、又、米國ノ詳細ニ付テハ別添第1號ノ2及3、及英國ノ詳細ニ關シテハ第1號ノ1ヲ參照)

九日ハ特ニ關係者ノ聽取會トシテ改曆ニ贊成スル俗間ノ團體及之ニ反對スル猶太教其ノ他ノ宗派ノ代表者ヲ招キ其ノ意見ヲ聽取シタリ(贊成トシテハ 4ème C.G.C.T./C.P.14. 及別添第2號、及、反對トシテハ4ème C.G.C.T./C.P/2., 4ème C.G.C.T./C.P/8 及第5號等參照)

十日ニハ再ビ委員會ヲ開キ一般的ニ意見ヲ交換シタル後、議長ハ要スルニ本委員會ノ使命ハ第4回交通總會ニ於テ改曆ニ關シ討議セラルヘキ各般ノ事項ヲ明確ナラシムルニ在ルトコロ、之カ爲メニハ改曆ニ關スル準備的調査ノ經過ト各國ニ於ケル輿論ト宗教團體ノ態度ト又各種ノ提案トヲ含ム報告書ヲ作成シ之ヲ交通總會ニ提出スルノ要アルモノト爲シ而シテ之カ起草ノ爲メニ特ニ英、獨、佛、米等ノ委員ヨリ成ル起草委員會ヲ設クルコトヲ諮リ、斯クテ十一日及十二日ハ報告ノ起草ニ當リ、十三日ハ大體別記要旨告書案ノ報(4ème C.G.C.T./C.P.11, 4ème C.G.C.T./C.P./11 (Suite))ヲ委員

會ニ附議シ、若干輕微ナル修正ノ後、之ヲ採用シ、更ニ交通總會ニ羅馬法王廳ノ代表者ヲ傍聽者トシテ招請スルコトヲ交通委員會議長ニ求ムル書翰(4ème C.G.C.T./C.PP/12)ヲ決定シ、終リニ各國ノ意見ニシテ未ダ交通委員會ニ提出セラレサルモノアル處之等ハ能フ限り速ニ其ノ送付ヲ求ムヘシトノ決議(M.L.I.O.1931.VIII)ヲ採用シタリ。而シテ本委員會ノ模様ニ依リ改曆問題ノ成行ヲ察スルニ、(1)移動祭日(主トシテ復活祭)ノ安定ニ付テハ僅カニ宗教關係ヨリ幾分ノ反對ハアルベキモ各國ノ輿論ハ概ネ一般ノ改曆問題トハ切り離シ少ク共復活祭ノミハ之ヲ安定セシムヘシトノ意見ナルニ依リ、假令一方ノ曆ノ單純化ニシテ實現セザルトスルモ、復活祭ノミハ四月ノ第2土曜日ニ次グ日曜日トシテ安定セラルルノ可能性アルヤニ認メラル(尤モ之ハ我邦ニハ關係ナシ)一方(2)「グレゴリ」曆ノ改正ニ付テハ(イ)1ヶ月ヲ4週間28日1年ヲ13月トシ、年末ノ1日ヲ白日(「ブランク・デー」)トスルノ案、(ロ)1年ヲ12月トシテ四ツノ四半期(3ヶ月)ニ分チ、各3ヶ月ヲ夫々30日、30日、31日トシ、年末ノ1日ヲ別案同様白日トスル案、及(ハ)現在通り1年ヲ12ヶ月トシテ四ツノ3ヶ月ニ分チ最初ノ三ツノ四半期ヲ夫々30日、30日、31日トシ最後ノ四半期ヲ30日、31日、31日トスルノ三案アリ。前二者ハ何レモ1日ノ白日(閏年ニハ2日)ヲ設ケテ週日ヲ一定セシメ、永久曆ヲ創メムトスルモノナルガ何レモ國ニ依リ民間ニ於テ相當有力ナル反對アルノミナラズ特ニ白日ノ設定ニハ或種宗教關係ニ於テ絶對的反對アルガ故ニ之ガ實現ハ相當困難ト認メラル。又第三案ハ四半期間ノ比較ヲ相當正確ナラシムルノ利益ハアルモ其ノ内容ハ現在ト大差ナク從テ改正ノ效果ハ言フニ足ラサルナリ。

別記

曆改正準備委員會報告要旨下記ノ通

第一章 本委員ノ使命及交通總會ニ於ケル討議ノ範圍

交通委員會ノ要求ニ依リ理事會ハ第4回交通總會ノ議題トシテ「經濟的及社會的見地ニ於テスル移動祭日ノ安定化及「グレゴリ」曆ノ單純化問題」ヲ加ヘタルガ之ヨリ曩1923年交通委員會ハ改曆問題ノ準備的調査ノ爲メ改曆特別委員會ヲ任命シ其ノ結果ニ依リ更ニ各國ニ國內委員會ヲ設ケシメ國內諸關係者ノ意見交換ニ依リ報告ノ作成提出セシムルコトトシタリ

本委員會ハ茲ニ夫々ノ政府ヲ公式ニ代表スルコトナシニ之等ノ國內委員會ノ意見ヲ要約綜合シ總會ニ於テ研究スベキ事項ヲ組織ニ配列スルト共ニ豫メ其ノ手續ヲモ定ムルコトトシタリ

而シテ總會ハ經濟的及社會的見地ニ於テノミ改曆問題ヲ審議スベク即チ宗教的立場ニ於テスル論議ハ一切之ヲ宗教當局ニ一任スベク又改正ノ結果ト宗教的諸傳統ニ如何ナル影響ヲ及ボスベキヤノ議論モ總會ノ取扱フベキ事項ノ範圍外ニ在ルモノトセリ

第二章 移動祭日ノ安定化

第1, 現状ノ不便ト改正案

現在ノ復活祭ハ三月22日ヨリ四月25日迄ノ間ノ35日間ヲ移動スル爲メ學校教育, 行政並裁判事務, 一般ノ商業, 運輸交通諸流行品ノ製造又ハ織物業及「ホテル」業等ノ蒙ル不便ハ甚大ナリトシ

斯ル不都合ヲ避クル爲メ曩ノ改曆委員會ハ四月ノ第2土曜日ニ次グ日曜日ヲ復活祭トスルコトヲ提案シタリ. 尤モ永久曆ノ出現セサル限りハ7日ノ間ヲ移動スルコトハ免レ難ク斯ル場合ニハ之ヲ固定シタリトハ稱シ難ク, 寧ロ安定化ト云フベク之ニ對シ永久曆ノ成立セル場合ニハ其ノ時日ハ全ク一定スベキニ付其ノ際ハ固定セラルルコトトナルベシ

第2, 輿論ノ狀態

國際商業會議所及國際鐵道聯合ガ運輸交通ノ見地ヨリ復活祭ノ安定ニ大賛成ナルハ素ヨリ, 又學校教育上祭日安定ノ必要ナルハ各國文部省ノ等シク之ヲ認ムル所ニテ, 獨, 「エストニ」, 芬蘭, 佛, 加奈陀, 希臘, 印度, 新西蘭, 和蘭, 羅馬尼, 瑞典, 瑞西及「チエツク」ノ各政府ハ既ニ之ヲ明言シ居リ, 而シテ各國ノ國內委員會モ, 曆ノ一般的改正ハ兎モ角, 祭日ノ安定ニハ概ネ無條件ニテ賛成シ居リ, 即チ獨, 白, 米, 英, 匈牙利, 和蘭, 瑞典, 瑞西, 波蘭ノ各國委員會ノ報告ハ悉ク別項ノ改正案ニ賛成ニテ, 就中英國ニテハ既ニ1928年ノ法律ニ依リ復活祭ヲ四月ノ第2土曜日ニ次グ日曜日トスルコトニ定メ, 之ガ施行期日ハ勅令ニ依リ定メラルベシトノコト, 只伊太利ハ曆ノ改正ニハ勿論祭日ノ安定ニモ興味ヲ有セズトシ, 又葡萄牙ハ羅馬法王廳ノ定ムル所ニ從フベシトノコトナリ

第3, 宗教當局ノ態度

羅馬法王廳ハ祭日ノ安定ハ教義上絶對ノ困難アリトハ認メザルモ 教會多年ノ尊フベキ傳統ヲ變更スルニ付テハ 重大ナル一般公益的ノ理由アルヲ要スベク從テ斯ル重大ナル社會的且經濟的ノ必要アリトセラルル時ニ改メテ之ヲ考慮スベシト爲シ、又英國ノ教會ハ教理上之ニ反對スベキ格別ノ理由ナキモ他ノ基督教派ガ一様ニ之ニ同意スルニアラザレハ自ラモ之ニ贊成スルコトナシトシ、米國ノ舊教派亦同様ノ意見ニテ、一方米國及獨逸ノ福音教會派ハ祭日ノ安定ニハ贊成、更ニ米、墺、白、¹チエツコ²、丁抹、佛、獨、英、和蘭、匈牙利、瑞典及瑞西ノ新教派教會モ亦同様贊成ナルガ故ニ斯ル狀勢ヲ總會ニ報告スルコトハ問題ノ解決上有利ナリトシタリ。

第三章 曆ノ一般的改正

第一、現行曆ノ缺陷ト改正案

(a) 年ノ部分ノ長サノ不均等ナルコト

年ノ部分タル月、四半期、半期ハ不均等ナル長サヲ有シ、即チ月ハ28日ヨリ31日迄アルガ故ニ各四半期ノ日數ハ90日、91日、92日及92日トナリ前半期ハ後半期ニ比シ2日丈ケ少ナク、尙各月、四半期及半期ハ週ノ全數ヲ含マズ、週ハ常ニ月、四半期又ハ半期ニ跨リツツアリ。之ガ爲メ統計、會計其ノ他日常一切ノ取引上不都合ナリ。

(b) 曆ニ不變性ナキコト。

現行曆ハ不動ニアラズ。毎年變化ス、即チ年ハ52週間ニ1日又ハ2日ヲ加ヘタルモノナルガ故ニ年ノ元旦ガ日曜日ニ當ラバ次ノ元旦ハ月曜日トナルベク斯クテ7年ニ亘リ元旦ノ週日ハ年々相異アルベキ處、而モ此ノ間4年ニ一度閏年アルガ爲メ事實上ハ28年後ニ非レバ一定年ノ曆ノ再來ハナキ譯ナリ從テ。

(イ) 定期的事件ノ日ヲ正確ニ定ムルコト能ハズ、即チ現行曆ニ於テハ或ル事件ノ日ヲ定ムルニ付テハ「¹月ノ第何日目²」又ハ「¹月ノ第1日曜日ト²」言フガ如クセザルベカラサル處第何日目トスルニ於テハ其ノ日ガ恰モ日曜又ハ祭日トナルコトモアルベク從テ毎年之ヲ決定シ直スノ要アルベク、又第何曜日トスルトキハ其ノ日ハ毎年異ナリタル日トナルノ不便アリ。

(ロ)四半期ノ週ノ位置ハ毎年異ナリ、週ハ種々ノ形式ニ於テ常ニ年ノ部分ニ跨ル爲メ、統計又ハ計算等ニ於テ煩雜ヲ來スベシ。

(ハ)月ノ 1日、15日、30日等ハ社會生活上重要ナル日ナルニ拘ラズ往々ニシテ日曜日ニ當ルコトアリ。諸種ノ取引上不便少シトセズ。

(ニ)要スルニ年ノ部分ノ不同ハ各種統計上ノ比較ヲ妨ゲ又日常取引上ノ計算ヲ複雑ニシ社會生活上ノ損失測ルベカラズ。

第二、改正案

(1) 永久曆ヲ創定セズシテ四半期ヲ均等ナラシムル方法。

不動曆ヲ創メズシテ年ノ部分ノ長サノ不均等ヲ救済スル爲メ單ニ四半期ノ大凡ノ均等ヲ得ル方法トシテ各四半期ヲ30日、30日、31日トシ最後ノ四半期ニ余リノ 1日ヲ加フルモノナルガ斯クスルニ於テハ四半期ヲ以テスル取引所又ハ銀行ノ計算並氣象上ノ統計等ニハ相當有利ナルヘシ。尙此ノ種ノ方法ニシテ更ニ不完全且單純ナル改正トシテハ單ニ八月31日ヲ二月ノ末ニ齎ス方法アリ。之等ハ何レモ從來ノ傳統ヲ破ルコト最モ少ク其レ丈ケニ改正ハ容易ナルベキモ、一面之ニ依ル利益ハ敢テ曆ノ變更ヲ理由付ケル程ノモノナリヤ否ヤハ疑問ナリ。

(2) 週外日(白日)ヲ含ム永久曆

現行曆ノ移動スル唯一ノ原因ハ1年ガ52週ト1日ヨリ成ル故ガナリ。從テ通常 1年ヲ364日トシ或ル年ニ補充的ノ 1週間ヲ加フルトキハ斯ル不便ハ除キ得ベキモ此ノ種ノ方法ハ現行曆ニ比シ却テ劣ルモノト認メラル。サレハ「グレゴリ」曆ノ年ノ長サヲ變更セズシテ而モ永久曆ヲ創定スル方法トシテハ端數タル1日(閏年ニハ2日)ヲ週外日即チ何曜ト稱セザル白日トスルノ外ナキナリ。而シテ52週ニ加ヘラルトキ週外日ハ年ノ終リ即チ1年12ヶ月ヲ維持スルトキハ各四半期ヲ31日、30日、30日トシテ十二月ノ31日目ニ置キ 1ヶ月28日ノ年13ヶ月トスルトキハ十三月29日トシ又閏年ニ於テハ更ニ餘リノ1日ヲ前半年ノ終リ又ハ後半年ノ初メニ置クベキナリ。斯クテ改曆特別委員會及各國內委員會ノ考究シタル方法ハ次ノ二案トナル。

(a) 1ヶ月ヲ28日トシ、1年ヲ13ヶ月トスルコト。此ノ案ヲ現行曆ト比較スレバ下ノ利點アリ、

(イ)各月ハ同數ノ日ヲ含ミ、(ロ)且同數ノ全週間ヲ有シ、月ノ初ニ於テモ亦終ニ於テモ週ノ端ニ當ルコトナシ。又年ノ四半期ハ13週間ナリ。(ハ)週、月及年ノ對當日ハ永年變ズルコトナク、從テ集會日、裁判日、教育計劃等ニ關スル永久の日附ノ設定ハ容易トナル。(ニ)月給ノ場合、所得及支出ノ期間ガ相一致シ家計及事業ノ豫算モ單純化セラル。(ホ)祭日ヲ除ケバ凡テノ月ノ活動日ハ比較シ得ルコトトナリ、其ノ他統計、計算等ニ於テ著シク手數ヲ省略スルコトヲ得、尤モ之ニ對シ又次ノ如キ不便モアリ、(イ)13ナル數ハ2、3、4及6ニテ割り切レズ、(ロ)年ノ四半期半期ハ完全ナル月ヲ含マズ、(ハ)計算簿ハ13ヲ要シ、支拂數モ亦13トナルガ故ニ計算及支拂ノ手數ヲ増ス、(ニ)過渡期ニ於テハ此ノ案ノ採用ハ統計及對當日比較ノ爲メ幾多ノ更正ヲ必要トス。

(b) 1ヶ月ヲ30日若クハ31日トシ、現在通1年ヲ12ヶ月トスルコト。

此ノ案ハ1年12ヶ月ヲ維持シ且週外日ヲ追加スル條件ノ下ニ夫々30日ヲ2ヶ月31日ヲ1ヶ月ノ4半期トナル。之ヲ現行曆ニ比較シテ下ノ利點アリ。

(イ)半期及四半期ハ均等ニテ各々完全ナル月及週ヲ含ミ、四半期ハ13週ナリ、(ロ)半期及四半期ハ俗間及宗教的祭日ヲ除ケバ何等ノ調整ヲ必要セズシテ正確ニ比較スルコトヲ得、(ハ)此ノ方法ハ傳説ヲ變更スルコト少ク且過渡期ニ於テモ大ナル困難ヲ惹起スルコトナシ。尤モ又次ノ不便アリ。(イ)月ノ長サハ均等ナラズ、從テ直接之ヲ比較スルコトヲ得ズ。更ニ各週ノ日ノ數及經濟的價値モ等シカラズ。例ヘバ或ル月ハ5回ノ土曜日ヲ有スベキモ、他ノ月ハ5回ノ日曜日ヲ有スルコトアルベシ(ロ)計算ハ四半期及期ニ於テスルヨリモ月ニ付テスル方遙ニ頻繁ナルガ故ニ四半期及半期ヲ均等ナラシムルコトハ月ヲ均等ナラシムルコトニ比シ重要性少ナシ。(ハ)月ハ完全ナル週間ヲ含マズ、從テ月ノ終ニ於テ週ノ端數日ニ付支拂ヲ爲スコトトナル。(ニ)日附ハ各月共同1週日ニ當ルコトナシ。

第三、上ニ對スル輿論ノ狀態

(1) 現行曆ノ不便救済ノ爲メ改正ハ希望スベキコト。

現行曆ノ不便ナルコトハ何レノ國ノ國內委員會ノ報告モ例外ナク之ヲ認ムル所ナルガ、サレバトテ之カ改正ヲ要望スルヤ否ヤハ國ニ於テ異ナリ。

即チ英、佛、伊及亞爾然丁ハ全體トシテ曆ノ改正ニハ大シタ關心モ有セザルカ如ク、反之、獨逸及米國ハ此ノ問題ニ特別ノ關心ヲ示シ、曆ノ改正ニ付格別ノ好意ヲ有ス。瑞典ハ慎重ナル考究ニ依リ凡ユル方面ヨリ此ノ問題ヲ解明スルノ要アリトシ、又瑞西ハ慣習ニ必要以上ノ變更ヲ加ヘザル限リ「グレゴリ」曆ノ改正ハ有益ナリトシ、更ニ伯刺西爾及葡萄牙モ亦大體ニ於テ改曆ニ好意ヲ有ス即チ、

- (2) 永久曆ヲ創定セスシテ四半期ヲ均等ナラシムル案ニ對シテ佛ノ國內委員會ハ一般ノ永久曆ノミガ改正ヲ合理的ナラシムルモノトシテ永久曆ヲ創定セザルガ如キ一切ノ改正案ヲ斥ケ、反之、亞爾然丁及英國ハ其ノ國ノ輿論ハ永久曆設定ノ如キ廣汎ナル改正ヲ支持セズトシ、單ニ四半期ヲ均等ナラシムル程度ノ改正ヲ可トシ、尤モ亞爾然丁ハ世界ノ大勢ガ白日ヲ設クルコトニ傾クトセハ寧ロ12ヶ月説ヲ探ルモノ、匈牙利ハ最初ノ三四半期ヲ30日、30日及31日、最後ノ四半期ヲ30日、31日及31日トスルコトヲ勸奨シ、又伊太利ハ曆ノ改正ハ精々各四半期ノ日數ヲ大體均等ナラシムル程度ニ止ムベキモノト爲シ、和蘭ハ白日ノ設定ニハ反對ナルモ四半期ヲ均等ナラシムルコトニハ贊成シ、瑞西ハ永久曆ヲ創定セザル迄モ各四半期ノ日數ヲ大體均等ナラシムルヲ可トセリ。

- (3) 永久曆ノ創定ニ對シテ

獨、白、米、佛、葡、瑞西、波蘭、「チエツク」ハ永久曆ノ設定ヲ可トシ、反之、匈牙利、伊太利及和蘭ハ週外日ノ設定ヲ含ム永久曆ニ反對セリ。尙週外日ノ設定ニ極力反對スルモノハ猶太教及浸禮教派並第7日「アバンテスト」ノ徒ナルガ此ノ派ノ反對ハ強チ教理ニ基クニアラズシテ寧ロ其ノ派ノ經濟的及社會的困難ニ因由スルモノト認メラル即チ猶太教徒ニ依レバ其ノ派ノ安息日 Sabbath ハ古來ヨリ傳承ニ從ヒ必ず第7日目ニ之ヲ祝フノ要アリ現在恰モ俗曆ノ土曜日ニ當ル處、1日若クハ2日ノ週外日ヲ設定スルトキハ週ノ規則的循環ハ中斷セラルベキニ依リ安息日ハ現在ノ如ク土曜日ト一致セザルコトトナルベク又「バプテスト」並「アバンテスト」ニトリテモ同様、聖息日ハ現在ニ於ケルカ如ク日曜日ト一致セザルコトトナリ、而モ之等ノ派ハ假令「グレゴリ」曆ニ如何ナル改正アルトモ依然

嚴格ニ 7日毎ニ安息スベキガ爲メ其ノ派ノ社會並經濟生活上多大ノ不便ヲ來スベシトスルモノナルガ之ニ對シ永久曆ノ設定ヲ唱フルモノハ週ノ規則的循環ノ中斷ニ依リ此ノ種宗派ニ現在ニ比シ格別ノ不便ヲ與フルトハ考ヘラレザルモ而モ假ニ同派ニ幾分ノ不利アリトスル世界ノ文明人ノ大多數カ之ニ依リ大ナル恩惠ヲ享クルトセハ文明人ノ 1%ニモ足ラザル少數宗派ノ利益ヲ犠牲ニスルモ亦已ムヲ得ザル所ナリトセリ。

而シテ週外日設定ヲ含ム次ノ二改正案ニ對スル各國ノ態度ヲ見ルニ。

(イ) 28日13ヶ月トスル案ニ付テハ。

獨逸ニ於テハ國內委員會ノ收受シタル回答ノ三分ノ一ハ本案ニ贊成ノ由ニテ特ニ鐵道會社及商工業ノ大企業者ハ概ネ本案ニ好意ヲ有シ、米國ニテハ既ニ多數ノ大規模ナル商工業會社ハ現行曆ノ外ニ 28日13ヶ月ノ補助曆ヲ併用シ大ニ便宜ヲ得ツツアリ。斯クテ大多數ノモノハ本案カ世界的ニ採用セララルコトヲ要望シツツアリ。佛蘭西ニ於テモ曆ヲ改正スルトセハ徹底的ニ13ヶ月ノ永久曆ト迄行カサル限り意味ヲ爲サズトシ、葡、波蘭、「チエツコ」及伯刺西爾モ亦此ノ案ニ好意ヲ有スルモノナルガ、反之、白耳義及瑞西ハ永久曆ヲ可トスルモ而モ13ヶ月案ニハ反對シツツアリ。

(ロ) 30日若ハ31日ノ12月トスル案

獨逸國內委員會ノ收受シタル回答ノ大多數ハ本案ニ贊成ニテ、白耳義ノ委員會亦然リ。瑞西ノ委員會モ 1年ヲ12ヶ月四半期ニ分チ、初メノ三ツノ四半期ヲ各91日トシ、終ノ四半期ヲ 1日ノ週外日ヲ加ヘテ92日トスベク365日目ノ日ヲ十二月30日ノ次ニ置キ、「ゲルベスタ」ト稱シ、閏年ニハ六月30日ノ次ニ更ニ 1日ノ週外日ヲ置キ 1月 1日ハ常ニ日曜トスベキコトヲ提案シ、佛蘭西ノ鐵道ハ之ヲ支持セリ。

第四、宗教當局ノ態度

羅馬法王廳及英國教會並猶太教徒等ノ態度ハ大體別述ノ通り。尙米國基督教會聯合會議ハ曩ニ曆ノ單純化ノ問題ハ道德的又宗教的ノモノニアラズ從テ敢テ其ノ關與スル所ニアラズト宣言シタルモ尙同會議ガ後日其ノ各派ノ主管者ニ照會シタル處ニ依レバ回答1500ノ中其ノ 75%ハ永久曆ノ設定ニ好意ヲ有シタリトノコトナリ。

第四章 總會ノ手續

此ノ問題ガ公式ニ國際論議ノ對象トナリタルコトハ頗ル稀ナルニ加ヘテ極メテ微妙ナル事項ナルガ故ニ之ガ取扱ノ手續トシテハ總會ニ於テハ第1回總會ノ前例ニ從ヒ初メカラ先ヅ委員會ヲ開キ各政府ヲ拘束スルコトナク極メテ自由ニ討議セシメ其ノ結果ヲ總會ニ報告セシメ總會ハ第二段トシテ更ニ小委員會ヲ作り如何ナル點ニテ政府ノ合意ガ成立スルヤ又如何ナル形式ニ依リ協定スヘキヤヲ研究セシムルヲ可トス。

而シテ右ノ委員會ニ於テハ復活祭安定ノ社會的及經濟的の方面ト曆ノ一般的改正ノ問題トハ切り離シテ別途且順次ニ協議スルヲ便宜トスベク尙ホ曆ノ一般的改正ニ付テモ同様(1)現行曆ノ不便、(2)永久曆設定ノ原則、並永久曆及週外日ヲ設ケズシテ單ニ四半期ヲ均等ナラシムル改正曆ノ、夫々ノ效能ト(3)13ヶ月及12ヶ月ノ二種ノ永久曆ノ夫々ノ利點トハ別途且順次ニ取扱フヲ可トスベシ。

尙ホ總會ハ其ノ討議ノ途次ニ於テ問題ノ二ツノ範疇即チ一般的又ハ斯々ノ案ニ依ル曆改正ノ希望スベキコトト改正ノ即時適用ノ可能性トニ關スル問題トハ之ヲ區別シテ考慮スルヲ便宜トスベシ。

附 記

上記の報告は、去る六月のジュネーヴに於ける改曆準備委員會の出席者から我が外務省へ致された公式の報告書である。可なり形式の備はつたもので、又、内容も一通りの出来ばえのものである。——こうしたもの、乃至、いろいろな報告や研究資料が外務省には以前から集つてゐるのであるが、かんじんの國內委員會が我が國には無いため、此等のものが皆御役所の机の引出しに、しまひ込まれたまゝ、何の役目も勤めず、國民は何から何まで盲目を強いられることは、愚劣な話と言はなければならない。

上記の報告書は、次頁の手紙に添えて、最近、外務省から京都帝國大學の山本教授へ送られたものである。(次頁を見られよ。)

外務省より山本教授へ來書

拜啓陳者國際聯盟改曆問題ニ關シ本月10日附貴信ヲ以テ御申越ノ趣了承。御意見ノ通り本件ハ頗ル重要問題ナルニモ不拘、本邦朝野ノ輿論モ誠ニ冷淡ノ様認メラレ遺憾ニ存居候。唯本邦ニ於テハ人口ノ大半ヲ占ムル農民階級ハ依然舊曆ヲ慣用スル爲メ太陽曆ニ大ナル關心ヲ有セザルト、國民ノ實生活ニ於テ七曜ノ點ヲ餘リ重視セザル爲メ現行曆ノ不備ヲ痛感スルコト他ノ歐米諸國ト異ル特殊ノ理由アルヲ以テ自然改曆問題ニ大ナル興味ヲ有セザル所以トモ認メ居リ候唯歐米主要國ニ於テ現行曆改正ノ必要ヲ認ムルニ一致スル場合ニハ本邦トシテモ結局大勢ニ順應スルノ止ムナキニ至ルヘキニ付キ其ノ際ニ處スル爲メ如何ナル改正案ヲ支持スベキヤニ關スル本邦朝野ノ一致セル意見ヲ取纏ムルコト肝要ト存ゼラレ候。

尙御參考ノ點ニ關シテハ、

- (1) 改曆問題ハ御承知ノ通り其ノ關係スル所頗ル廣汎ニシテ一國ノ行政經濟財政交通ニ影響アルノミナラズ、又他方教育學術宗教等ニモ交渉ヲ有シ國民ノ實生活ニ關係スル所鮮少ナラサルヲ以テ本問題ニ關スル決定ハ單ナル一省一局ニ於テ之ヲ爲シ得ベキモノニ無之、一方關係各省ニ於テ其ノ所管ノ見地ヨリ周到綿密ナル調査ヲ遂クルト共ニ他方民間諸團體ノ意見ヲモ徵シ其ノ結果ニ俟テ本件對策ヲ決定スルヲ要スル次第ニ有之、從テ改曆問題ノ具體的內容ニ關スル當省ノ見解ハ目下ノ處言明ヲ困難トスル次第ニ有之候。
- (2) 改曆問題ニ關スル國際聯盟ノ會議ハ來ル10月下旬「ジュネーヴ」ニ開催ノ第4回交通總會ニ有之、右會議ニ出席スベキ我邦代表ハ大使館參事官伊藤述史氏(巴里在勤)トナルベキ豫定ニ有之候。

右不取敢依命回答申進候。尙何等御參考迄ニ本年六月「ジュネーヴ」ニ於テ開催セラレタル改曆準備委員會ノ經過概要及送付候 敬具

昭和6年八月26日

佐藤外務省條約局第三課長

山本京都帝國大學理學部教授殿